

# 「東下り」を読む

——教材研究余滴——

岩 田 秀 行

もう十五年以上も前、中学と高校とで『伊勢物語』の「東下り」を教えたことがある。本稿は、その折りに考えた自分なりの「読み」を改めてまとめ直してみたものである。従って、専門の『伊勢物語』研究の動向を踏まえているわけでもなく、しかも『伊勢物語』の中のこの部分だけを切り出して、それを近世俳諧の発想と結びつけているため、視点の偏りは否めないかと思われる。また、専門外のことゆえ、資料調査の範囲も限られ、参照すべき大切な論文を見落としたのではないかとの不安もある。ただ、このような有名な章段は、様々の立場からの発言があつてもよいであろうと考え、不備はすべて筆者の責任として、掲載させていただくこととした。この点、御寛恕をいただければ幸いである。

大学では自分の専門以外の分野を教えるということは、あまりないが、中学や高校においては、好むと好まざるとに関わら

ず、様々な分野の教材を扱わねばならない。その教材が、自分の専攻分野のものであれば、諸種の原本に遡った調査・考察も可能であるが、専攻分野以外の作品に関しては、どうしても市販の註釈書類に頼らざるを得ない。しかし、そうした註釈書類には、一つ一つの言葉の辞書的な註釈は備わっていても、その言葉がその文脈の中で担っている意味というようなことについては、あまり触れられていない場合が多いというのをもまた実状である。結局、そうしたことについては各自で考える以外にはなく、専攻分野以外の作品に関しては、そのような文脈における意味を汲みとつてゆくことは極めて困難な作業に属する。

ところが、この「東下り」の教材をあつかっている折、偶々、小学館「日本古典文学全集」の頭註に、「かきつばた」は当時美しい愛人にとえられたという説明を見出して、辞書的な意味以外の文脈における意味合いをとらえることの重要性に気づか

された。しかもこの発想は近世俳諧の発想と類似的である。もし、「かきつばた」が右の様に考えられるのなら、それ以外の重要な言葉に関しても同様の考え方が可能なのではないかと思ひ始めた。以下は、そうした前提によるアプローチである。

一

この「東下り」は、

- 1、から衣……
- 2、駿河なる……
- 3、時しらぬ……
- 4、名にしおはば……

の四つの歌からなるが、まず1・4を先に考え、そのあとで2・3を考えることとする。これは、偶々、中学の教材で1・4のみのものを先にあつかい、そのあと高校の教材で2・3をも含めた全体をあつかったからであるが、しかしこれは、1・4が第一次伊勢、2・3が第二次伊勢以降の補入とする説に従うような形で段階的読みを行なう結果となった。補入説の当否は別として、1・4をもし、始めから同時にあつかったのでは、前者、後者の相違から、全体を統一的に読みとつてみようという考えは起らなかつたであらうと思われる。

まず、1・4の部分を見てみると、構成においてきわめて共通していることがわかる。両者とも、都から離れた所に来ており、何かを見て歌を詠む、そしてその歌によつて皆涙を催すと

いう点で一致している。歌は、そのクライマックスに位置しているのであるが、しかしそのクライマックスは突然あらわれるわけではなく、何かを見ることによつて引きおこされていることに注意しなければならぬ。1においては、それは「かきつばた」であり、2においては「都鳥」である。

歌というものが一話一話のクライマックスであり、その歌の心こそが一編における主題を提示しているとすれば、その歌を詠む契機となつているこれらの事物は、主題を考える上にきわめて重要な役割を果たしているのではあるまいかと考えられよう。

まず、1における「かきつばた」であるが、これは普通「八橋」が「かきつばた」の名所であるからここに出てくるように常識的には理解されているようである。しかし、「平安和歌歌枕地名索引」によつても、「八橋」と「かきつばた」が、この話以上に結びつくような例歌は見当たらない。むしろ、この話によつて「八橋」が「かきつばた」の名所になるのではあるまいか。それでは、ここに「かきつばた」の出てくる意味であるが、これは先に述べたように、「日本古典文学全集」の頭註にいう、「かきつばた」は当時美しい愛人にとえられていたからであるという説に従うべきではないかと思う。

『古今和歌六帖』の「かきつばた」の項に、

我のみやかく恋すらんかきつばたにほへるいもはいかにかあらん

(国歌大観番号三八〇〇、万葉集一九九〇、旧番号一  
九八六)<sup>(注1)</sup>

かきつはたにほへるいもをいぎなみにおもひ出でつゝなげ  
きけるかも

(三八〇一、万葉集二五二六、旧二五二二)

の二首を見出すことができる。二首ともに、「かきつはた」は「ほへるいも」につながっており、しかも離れている恋人への思いを詠むという点で、「から衣……」の歌の心と類似している。つまり、「東下り」における「かきつはた」は、折句としての役割だけでなく、「美しい恋人」への連想をひきおこし、歌の心と密接に関連したものであると考えられよう。<sup>(注2)</sup>

## 二

次に、4の「名にしおはば……」について考えてみる。この歌のきっかけは、「都鳥」という設定になっている。「みやことり」は、「古今和歌六帖」に、

おとまろ  
ふなぎほふほりえのかはのみなきはにきゐつゝなくは宮こ  
鳥かも

(二四七、万葉集四四八六、旧四四六二)

とあつて、「堀江の河」と結びつくことがわかる。これは、中世・近世を通じて変わらず、謡曲「隅田川」にも、

げにや舟競ふ、堀江の川の水際に、来居つつ鳴くは都鳥、

それは難波江<sup>ななわえ</sup>

(「日本古典文学大系」に拠る)

また、「俳諧類船集」に、

堀江摂津——都鳥

が付合になっていることでも明らかであろう。そして、この「堀江」の歌は、『万葉集』では、

堀江より水脈さかのぼる楫の音の間なくぞ奈良は恋しかり  
ける

(四四八五、旧四四六一)

の歌と並んでいるのである。つまり、前の歌における「堀江」の「都鳥」は単なる景物として詠まれているのではなく、この歌と併せ読めば、遠く離れて来た奈良の都への思いを託したものと考えられる。『俳諧類船集』に、

都を思——難波

とあるのも、これが受けつがれたものであるのかも知れない。現代の我々にとって、「都鳥」といえば、「隅田川」が連想されるが、それはおそらくこの「東下り」がもとになっているのであって、少なくとも『伊勢物語』の当時においては、「都鳥」は「堀江」を連想させるものであったに違いない。そして、この「堀江」において「奈良の都」に思いをはせるといふことが、「都鳥」にまつわる一定の連想関係であったと考えられそうである。

これが前提となつて始めて、この「東下り」の一話に、隅田

川で船に乗り、都鳥を見て京の都に残して来た恋人へと思いを  
はせる設定が明らかとなる。この一話は、いにしえのへ舟競ふ  
——堀江——都鳥——奈良の都」というパターンを、当代に移  
して、へ渡し舟——隅田川——都鳥——京の都」としたところ  
に、一つの重要なポイントがあつたということにならう。

以上のように、1・4の話はともに、非常に類似的構成であ  
ることがわかる。両者とも、「都への思い」を「都に残して来た  
恋人」によつて代表させているのである。相手と遠く離れるこ  
とによつて恋の思いがつのり、またその恋の思いが都と遠く離  
れているのだという旅情をかきたてる。さらにまたその旅情に  
よつて恋の思いが一層強くなるという、「旅の心」のあはれさが  
過不足なく表現されていよう。そして、もつとも重要なポイン  
トは、そうした「恋しい思い」を誘発するものとして、片や「か  
きつはた」が、また片や「都鳥」が設定されているということ  
である。それは単なる景物なのではない。おそらく『万葉集』  
の歌を前提として、「かきつはた」には「離れてあえぬ恋人への  
思い」が、また「都鳥」には「都から離れて都を恋慕う思い」  
が、それぞれ託されていると考えるのが妥当であらう。この二  
つの事物に気づくことが、歌の心へと読解をすすめていく際の  
ポイントなのだと思う。

### 三

次に、2・3の部分について考えてみる。この部分は前述の

如く、第二次伊勢以降の挿入部分という説があるように、1・  
4と2・3とに分けて考えてみた場合、1・4が非常に統一的  
構成を持つていたのに対し、2・3はまことにちぐはぐな感じ  
をうける。2は、都の恋人への恨みの歌であるから、1・4の  
二つの歌の心と、ほぼ重なりあうが、3の場合は、「都への思い」  
ということとまったく関係が認められぬような歌であり、この  
あたりをどう考えるかという点が問題となるであらう。

まず、2の歌であるが、この歌は諸註に尽くされているよう  
に、現実には会えぬのは仕方ないことであるが、夢にも会えな  
いのは、あなたが私を思ってくれぬからだという恨みの歌と考  
えられる。これは、現実にはあなたと離れていて会えぬがせめ  
て夢にでも会いたいものだという歌のパターンを前提としてい  
るのであらう。こうした例歌は多いが、たとえば、『万葉集』の  
「羈旅発思」に、

国遠み直には逢はず夢にだに我れに見えこそ逢はむ日まで  
に

(三一五六、旧三一四二)

と見えるあたりが最も参考になりそうである。

しかし、この点は通説通りで別に問題はなく、むしろ考える  
べきは、1・4が何かを見て思いを発すという型をとっている  
のであるから、これもそういうパターンに従つてはいはしまいか  
ということであらう。ここでは、「見し人（修行者）」が問題に  
なりそうである。『古今和歌六帖』を見ると、「むかしあへる人」

(岡田真之蔵書印本の表記、桂宮本には「むかしある人」の一  
項があり、

うつゝにもゆめにもわれはおもはざりきふりにし君にこよ

ひあはんとは

(二九一六)

という歌がみつかる。これは、『万葉集』では、

うつゝにも夢にも我れは思はずき古りたる君にここに逢は

むとは

(二六〇六、旧二六〇一)

の形で見える。つまり、昔のあなたとここで逢おうとは夢にも  
現にも思わなかったというので、これは「東下り」のこの部分  
を、まさに思いおこさせるような歌と言わねばならない。

今、この『万葉集』の歌を前提として、2の話を考えてみる。

『万葉集』の歌では、偶然、うつゝに昔の恋人に出会ったので  
あるが、「東下り」では、偶然、うつゝの山に昔見し人に出会った  
のである。「昔あへる人」「古りにし君」とは、『万葉集』では、  
昔の恋人であるが、これをそのまま「東下り」にもつてくると、  
その言葉のまま、「昔会ったことのある人」「年をとった人」と  
いうことになる。う。「修行者」とは、あるいは、「旧りにし君」  
の具象化なのであるのかも知れない。これが、歌の「うつゝに  
も夢にも人にあはぬなりけり」につながってゆくのであるから、  
この歌は次の様に解釈できないであらうか。即ち、

「ふりにし(年とった)人」には、ここ、「するがなるうつゝの

山べ」で出会ったけれども(それは、まったく、うつゝに  
も夢にも思わなかったことであるが)、遠くはなれた「ふり  
にし(昔の)」恋人であるあなたとは、うつゝは勿論、夢の  
中でも出会わないことであるよ。

というふうである。

つまり、「見し人(修行者)」との思いがけぬ出会いは、歌に詠  
まれた「昔あへる人」との出会いへと連想づけられ、都から遠  
く離れた今、せめて夢にでも会いたいのにながれ、都から遠  
くへの恨みへとつながってゆくのである。さて、こう考えてみる  
と、「見し人」との出会いは、単に歌を託すという設定だけでな  
く、「昔の恋人」への連想をかきたてる役割をも果たしているも  
のと言えるのではあるまいか。

#### 四

最後に、一番問題の多い、3の「時しらぬ……」の部分につ  
いて考えてみる。これは、すでに歌の解釈からして疑問が存す  
る。「雪いと白う降れり」とありながら、「鹿の子まだらに雪の  
降る(諸註これを、鹿の子まだらのように雪が降りつもっている  
と解する)」ということの矛盾はどう考えるか。これは、まず遠  
くから見たさまを言い、次に近く見た様を言ったのだとか、あ  
るいはまた、これは峰に残る雪によって実りの吉凶を占う  
山麓の村々の生活を背景にしているのだという民俗学的説明が  
あったりする。しかし、「雪降れり」といい、「雪の降る」とい

う言ひ方は、「雪残り」「雪残る」というのとはちがひ、やはり雪が降っているということなのではないかと思える。何ともあれ、まず「鹿の子まだらに」というのは、いかなる状態を言うのか、当時の用例に徴してみる必要がある。

しらやまのみねなればこそしらゆきのかのこまだらにふりてみゆらめ

(家持集二八五、夫木和歌抄七一四六)

わたつうみのおきにこちかぜはやからしかのこまだらに浪たかくみゆ

(入丸集二五七)

みよやひとしかのしまへといそげどもかのこまだらになみぞ立つめる

(重之集五、夫木和歌抄一〇五八七)

たかさごのしかなく秋のあらしにはかのこまだらになみぞたちける

(忠見集九)

これらを見ると、「鹿の子まだらに」という形容は、今眼前に「雪のまっ白に降る様」や「波のしぶきの立つ様」を表すもので、元来は「雪の消え残っている様」を言うのではないと思われる。つまり、波しぶきがパツと立つその斑状と、雪が霏々と降るその斑状とを言うのであろう。『古今和歌六帖』の「ゆき」に、この「時しらぬ……」の歌がみえるが、その一つ前に、

よをさむきあさとをあけていでみれば庭もはだらに雪はふ

りつゝ

(六八六、万葉集二三三二二、旧三三一八)

という歌がある。この「はだらに」は、田林義信氏蔵本には「まだらに」とある由で、「はだらに」という言葉には諸説あるものの、結局実態としては、「鹿の子まだらに」というのと類似の様を言うと考えてよいのであろう。ここでもまた、現在雪の降っている状態であることに注意したい。もつとも、この例の場合、庭の面が斑状になる状態を言うのであるかもしれないが、その場合でも、雪は現在降りつつあることに変りはないわけである。

さて、以上の様な根拠から、「鹿の子まだらに」を雪の降る様と解した場合、現実の問題として五月の晦日に雪が残っているというならまだしも、雪が降りつつあるというのはおかしいのではないかという疑問が呈せられるであろう。しかし、現実にはそうかどうかということ論じるのはあまり本質的ではないと思われる(現代でも実際、六月頃に高山で雪の降ることは稀ではない)のであるが、今はこれには触れない。むしろ、当時の常識において、富士とは一年中雪の降るものであったということを知ればそれで充分である。『古今和歌六帖』の「ながうた」に、

ふじの山をみて

山のべのあか人

あめつちの わかれしよゝり かみさびて たかくかしこ  
き するがなる ふじのたかねは あまのはら ふりあけ  
みれば わたかひの かげもかくれて てる月の ひかり

も見えず しらくもの いさりばかりと きょこそ  
きはふりける かたりつき いひはぎゆかん ふじのたか  
ねは

(二五〇一、万葉集三二〇、旧三一七)

とあるこの歌は、『万葉集』では傍線部分、「時じくぞ雪は降りける」となっており、例の有名な、

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける

(三二二、旧三一八)

の反歌がついているのである。また、同じく『万葉集』に、

富士の嶺に降り置く雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りける

(三三三、旧三二〇)

ともある様に、当時、富士山は年中雪の降っている霊峰であつて、六月十五日、夏の一番暑い一日に消えるだけでその夜はもう初雪を見るところというのが文芸に表現されて広く知られていた常識であろうと思われる。従つて、「田子の浦ゆ……」の歌も、冬の歌と考へては何の曲もないので、夏の歌と考へてこそ、「時じくぞ雪は降りける」の反歌となりうるのだと思われる。つまり、「東下り」の本文も、こうした当時の常識を前提として、五月の晦日に、「いと白う」「鹿の子まだらに」雪の降っている様を言うのではないだろうか。

次に「時しらぬ」の解釈であるが、これに関しては、山本登

朗氏が「浅間と富士」(『国語国文』昭52・8)という論文に、富士は時節をわかまぬ山であつて、今頃雪が降っているのは、まことに「時ならぬ」「すさまじい」ことであると、いわゆる「都」人における「あなか」の不審な現象をとがめたのだという説を出しておられる。この説は、「旅」の本意として後年、連歌「至宝抄」あたりでのべられている内容と一致するもので、極めて面白い考え方ではあるが、氏の説は、「時しらぬ」と「時ならぬ」とを同一のものと考えるところという手続から論をおこしているわけで、まずこの段階ですでに飛躍というものが認められるように思えてならない。

「時ならぬ」と「時しらぬ」とは本当に同じ意を表わすのだろうか。富士を「時節をわかまぬ田舎の山だ」とする考え方は、前述の「富士は夏も雪の降る霊峰である」とする当時の常識に抵触するのではあるまいか。氏は、それを「屈折のない作」と退けてしまふが果してそれでよいのであろうか。雪が年中降るといふとらえ方は、「富士」の他に、「白山」があり、「古今和歌六帖」の「ゆき」に、

きえはつる時しなればこしぢなるしら山は猶雪にぞありける

(七三八、古今和歌集四一四)

あらたまのとしをわたりてあるがうへにふりつむ雪のきえぬしら山

(七四七)

などに見える。富士の歌も白山の歌も、雪が年中降ることに対して、「すさまじ」という風にはとらえられておらず、むしろ畏敬嘆賞という感じの方が強いと考えられる。<sup>(注5)</sup>

どうも、「時しらぬ」というのは「時ならぬ」とは別であつて、

『万葉集』の富士の形容から考えれば、「時じくそ雪は降りける」という、その状態に対して言つた表現であらうと思われる。つまり、「時ならぬ」というのは、「ある期待された時節というものがあつて、それからはずれた状態」というようなことであるが、「時しらぬ」というのは、「時節というものはある限度があるにもかかわらず、その限度がわからない状態」というようなことではなかるうか(詳細は後述)。この両者が重なり合う部分は勿論あると思われるが、『万葉集』以来の「富士」とらえ方からしても、「時しらぬ」を「時ならぬ」と結びつけて、「すさまじ」としてしまふのはいかがかと思われるのである。

氏は、また「いつとてか」という表現も、「らむ」という現在の推量の助動詞をともなつてゐる形から考えて、「かのこまだらに雪の降る」状態をいぶかしみ、あえてその理由を「今をいつと思つてか」とたずねたもので、やはり、富士に対する嘆賞の歌とは考えられない根拠とされている。これは、「いつとてか」を「いつと思ひ(言ひ)てか」の形だと考える通説に従つてゐるわけであるが、しかし、「いつとてか」の用例をあげてみると、「いつと思ひ(言ひ)てか」という様な形で統一的に把握することはむづかしいように思われる。

1a、いつとてかわがこびざらん(やまんしなのなる)ちはやぶるあさまの山はけぶりたつとも

(古今和歌六帖七九〇、拾遺和歌集六五六、続古今和歌集一〇七六、貫之集六七三)

1b、いつとてか我がこびざらんみちのくのあさかのぬまはけぶりとめとも

(古今和歌六帖一六八四)

2、いつとてかきみがうからぬうきがうへにまたうきときはいふかひもなし

(長能集四五)

3、いつとてか花に心をつげざらんおろかに匂ふ春しなれば

(成通集四)

4、尼になりて後、人のもとより、むかしのやどに月は見るやと申して侍りければ

いつとてか月見ることのかはるべき世に有明のかげしたえねば

(今撰和歌集二〇〇)

5、いきてまたあひ見むことをいつとてかかぎりもしらぬ世をばたのまむ

(源氏物語・松風二八五)

右の用例を見ると、「いつとてか」のあとには、何かの状態が変

化・終了するという表現が来るのが一般的であると判断できる。

特に、1a・1bの歌は、恋の心であるから、一応の内容が全体から推量できるが、それはおそらく、次の様な意であろうと思う。

絶えることなくいつも燃えている、あの浅間の山（浅香の沼）の火の煙が、もし絶えることがあっても、私のこの恋に燃える思ひの煙は、いつになったら止むことがあるだろうか。（いや、おそらく、ずっとずっとあなたのことを思ひ、つづけることだろう。）

さて、『万葉集』から、これと類似の歌を搜すと、左のようなものが見つかる。

A、荒津あらかつの海潮うみしほ干潮ひしほ満ち時ときはあれどいづれの時ときか我が恋こひざらむ

（三九一三、旧三八九一）

B、人目ひとめ多おほみ常つねかくのみしきもらはばいづれの時ときか我が恋こひざらむ

（二六一一、旧二六〇六）

Aの意味は、

荒津の海は、潮が干てしまったり、また潮が満ちてしまったりする時があるけれども、私のこの恋の思ひは、いつになつたら止む時があるのだろうか。

ということであろうし、Bは、『日本古典文学全集』の訳、

人目繁さに、いつもこんなにはかりしていたら、いつになつたら、わたくしは恋しく思わずにいられるようになるの

だろうか。

がピツタリであろうと思われる。これらを併せ考えると、「いつとてか」という語は、「いづれの時か」という語と意味的に近いものであることがわかる。それは、ちょうど「いつとても」が、「いづれの時も」と近い意味であることと似ているとも言えよう。あれこれ考え併せるに、この「いつとてか」の元来の用法は、未来に対する疑問であつて、別の言葉で言い換えれば、「いづれの時にありてか」というような意であろうと考えられる。

そしてこう考えてみると、「いつとてか」の例として前にあげた他の歌も、一応この解釈で統一的に意を取ることができると思われるのである。それを次に示してみる。

2、いつとてかきみがうからぬ／うきがうへにまたうきときはいふかひもなし

いつになつたら、あなたは私につれなくなってしまうのだろうか。まったく、このままならぬ世をつらく思っているときに、あなたまでつれないのでは、本当に絶望的でがっかりしてしまいます。

3、新院御方にて人々毎春花盛心をよみし

いつとてか花に心をつけざらん／おろかに匂ふ春しなければ

いつたいいつになつたら、桜に心を引かれるということがなくなるのだろうか。いや、そういうことはおそらくあるまい。毎春毎春、桜の花はこんなに美しく

咲きはえるのであるから。

「新編国歌大観」に、「心をつげざらん」とあるが、原本未見ながら、「心をつげざらん」とあるものとし、「心をつげざらん」と解する。「心付く」は、心を寄せる、執心するという意と判断できる。

4、  
尼になりて後、人のもとより、むかしのやどに月は見ると申して侍りければ

いつとてか月見ることのかはるべき／世に有明のかげし  
たえねば

いつの世において、月を賞するということがなくなってしまうことがあるだろうか。いや、いつとても月を賞することに変わりがあるはずがない。いつの世も有明の月の光りは絶えることなく美しく輝き続けているのだから。

5、  
いきてまたあひ見むことを／いつとてかかぎりもしらぬ  
世をばたのまむ

いつになったら終るのか、その限度も知らぬはかないこの世の命であります、それを頼りにして、またあなた（入道）と生きて会うことのできる日を願っています。ちょうどそのように、いつまで続くかも知れない源氏と私（明石の上）との関係ですが、それを頼りにして、また都へ行って源氏と逢って契りを結ぶことを願っているのです。

歌は二句切れとし、「いき」には「生き」と「行き」との両意が、「あひ見む」には「入道との再会」と「源氏との愛の再契」との両意が、「世」には「この世」と「源氏との愛の関係」との両意が、それぞれこめられているものと解する。

さて、以上の「いつとてか」の考察をふまえると、山本氏が、富士をいぶかしむ気持ちであるという解釈の前提とした、「いつとてか……らむ」と呼応させる通説も、また考え直してみる必要がありそうに思う。本稿では、前述の如く、「いつとてか」「いづれの時にありてか」と解する立場なので、「いつとてか……らむ」として、「今をいつだと思つて……しているのであるうか」という解釈はとれなくなってくる。つまり、「いつとてか」は、未来に対する疑問と解するのであるから、それに「らむ」の現在推量を呼応させるのは、論理的におかしいということになってしまう。従つて、ここは「いつとてか」を下に呼応させず、上にかかるものと考えざるを得なくなる。すると、ここは倒置ということになり、

いつとてか時知らぬ山は富士のね  
の形であることになる。しかも、この形はすでに、『源氏物語』に、

いつとてか限も知らぬ世をば頼まむ  
とあつた形と同じであることに気づく。また、『万葉集』において参考となる形は、

他国に君をいませめていつまでか我が恋ひ居らむ時の知らなく

(三七七一、旧三七四九)

の歌であろう。「日本古典文学大系」では、この「時」を「限度・期限」と解する。

つまり、こうしてみると、この「時」は、「限り」と似た意味を表わすものではないかと思われる。この場合、先掲の「万葉集」三九一三(旧三八九一)の歌が参考となるが、この歌は、

荒津の海は、いつも同じ状態ではなく、潮が干てしまふ  
「時」、また潮が満ちてしまふ「時」という、そういう(限度の)「時」があるのに、私の恋はいつたいつ、そういう恋の思いのなくなる(限度の)「時」があるのだろうか。という事で、これと併せ考えれば、この「いつとてか時知らぬ山は富士のね」は、

普通の山の雪は、いつまでも降りつづくものではなく、降らなくなってしまう(限度の)「時」があるものなのに、富士の山は、そういう「時」がなく、いつも雪が「時じく」降りつづいている。この山の雪は、いつたいつになつたら降りやむ(限度の)「時」があるのだろうか。そういう「時」を知らない山は、この富士の嶺だ。

というようなことを言っているのだと思われる。この解釈で、歌全体を訳してみると、

時知らぬ山は富士のねいつとてか／かのこまだらに雪のふ

るらむ

いつになつたら限りが来るのか、その限度を知らないのは富士の山の嶺(の雪)だ。それだから、五月の晦日の今でもこんなに真白に雪が降りつつあるのであろう。

というようにならうと思う。つまり、これは決して、富士をいぶかしんでいるのではなく、夏なのに、真白に雪の降っていることへの讚嘆であり、「時じくぞ雪は降りける」と言い、「真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける」と言う「万葉」の歌の心を、いささか「古今」風に言いかえただけであろう。

さて、以上のように語句の疑問を一応解釈したとしても、なお問題は存している。それは、始めに述べた2・3の歌の不統一ということである。これは、山本氏がまず疑問にされた、「東下り」の基調である「都への思い」という心情が、この3の歌からは汲みとれないということも関わっている。山本氏の「都」と「ゐなか」という解釈も、実はこの疑問を解決せんとするがためであつて、山本氏の解釈を否定した今、それではこの根本の疑問をどのように解釈するかという問いに対して、本稿なりの答えを提示しておく必要があるであらう。

まず、これを考えるために参考となるのは、「小式部内侍本」の2・3の部分である。「鑑賞日本古典文学」の引用によると、それは次のごとくである。

昔、男、すずろなる道をたどりゆくに、駿河の国宇津の山  
口にいたりて、わが入らむとする道は、いと暗う細きに、

薦かへでは茂り、もの心細く思ほえて、すずなるめを見ることと思ふに、修行者にさしあひたり。「かかる道にはいかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京にその人のもとにとて、文かきてつく。

中空にたちある雲のあともなく身のいたづらになりぬ  
べきかな

とてなむつけける。かくて思ひゆくに、

駿河なるうつゝの山のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり

と思ひゆきけり。

これによれば、都に託したのは、「中空に……」の歌であつて、「駿河なる……」の歌は、その後一人で都の恋人を思つての歌といふことになつてゐる。

今、歌の順序は別に問わぬものとして、注意すべきは、二つの歌がここでは極めて密接な関連をもつて配されてゐるということである。つまり、修行者に歌を託したあと、その歌によつていつそ明瞭に喚起された恋人への思いを抱きながら道を行きつつ詠んだのが後の方の歌であるということになつてゐるわけである。この、「時しらぬ……」の歌も、そのような関連を考へてみることはできぬであらうか。即ち、この歌もまた、単なる富士の雪を詠んだというだけではなく、「駿河なる……」の歌によつて喚起された恋人への思いがこめられたものと解釈できぬものであらうかといふのである。

さて、そこで、一年中降る雪というものは、どのように歌に詠まれてゐるかといふと、

ふるきやまとまひのうた  
しもとゆふかづらき山にふる雪のまなく時なくおもほゆるかな

(古今和歌集一〇七〇)

み吉野の 耳我が嶺に 時なくぞ 雪は降りける 間なく  
ぞ 雨は降りける その雪の 時なきがごと その雨の  
間なきがごと 隈もおちず 思ひつつぞ来し その山道を

或本の歌

み吉野の 耳我が山に 時じくぞ 雪は降るといふ 間な  
くぞ 雨は降るといふ その雪の 時じきがごと その雨  
の間なきがごと 隈もおちず 思ひつつぞ来し その山  
道を

右は句々相換れり。これに因りて重ねて載す。

(万葉集二五・二六)

み吉野の 御金が岳に 間なくぞ 雨は降るといふ 時じ  
くぞ 雪は降るといふ その雨の 間なきがごと その雪  
の時じきがごと 間もおちず 我れはぞ恋ふる 妹が正  
香に

反歌

み雪降る吉野の岳に居る雲の外に見し子に恋ひわたるかも

(万葉集三三〇七・三三〇八、旧三二九三・三二九四)

『古今集』の歌は、「大歌所御歌」とあり、また『万葉集』の二五・二六の歌は、「天皇の御製歌」とある。おそらく、右の歌の形は、伝承歌として著名のもので、「年中降る雪」から、「絶えず続く恋の思い」への連想は、極めて自然ではないかと思われる。即ち、「富士の雪——時じくぞ雪は降りける——限も落ちず思ひつづぞ来しその山道を」という連想の糸をたぐれば、宇津の山の道のあとに、富士の雪を配したというのも、恋の思いの表現としてとらえられることになつてくる。まず「駿河なる……」の歌で、恋人への恨みを述べる。そして、「あなたはもう私のことを忘れてしまつたのか」とわびしい思いを抱きつつ、なおも山道を行くのである。そうすると富士が見えた。雪が真白に降っている。あの雪が間なく時なく降っているように、私はこの山道を行きながら、片時も忘れることもなく、こんなにあなたのことを思っているのだ、というような全体の「読み」を考へてみる事ができるであらう。

もし、右のような読み方が許されるなら、2・3の歌も、まず恋人への恨みを述べ、そのあと、恋人への断えぬ思いを託したものとしてみわめて統一的に把握できる。すると、ここは、「山道」から「年中降る雪」へと描写がとんで、その背後にある「断えぬ恋の思い」は表現の裏に隠され、表には現れてこないということになる。このような表現を俳諧では「ぬけ風」というが、まさしく、ここも近世俳諧と共通した表現のように思われる。どうも、我々は古典というものを、あまり生真面目に表面の意

味だけでなぞりすぎていゝのではあるまいか。以上行なつた私の解釈はまったく間違つていゝのかも知れない。しかし、こう解釈することによつて始めて、私自身には「東下り」の主題が統一的に明瞭にとらえられたように感じられる。

## 五

以上の様に、この「東下り」一段の主題は、「旅に在つて都に残して来た恋人へ馳せる限りなき思い」というようなことであると思われるが、現行の註釈のままでは、その主題へと読みを進めてゆくことは、かなり困難で、また歌がクライマックスに位置するということも、具体的に理解しにくいものとなつてゐる。もし、本稿でとつたような読みが許されるならば、右のような問題は、「かきつはた」「都鳥」「昔あへる人」「時じく降る雪」といった、キーワードを考へることによつて解決できるであらう。

それぞれの言葉は単なる対象を表わすだけのものではなく、背景に過去の文芸の伝統を背負い、一定の連想をもつた特殊な表現なのであると考へられる。つまり、「かきつはた（＝離れて会えぬ美しい恋人）」「都鳥（＝都を恋いしう思い）」「昔あへる人（＝偶然の再会）」「時じく降る雪（＝間断なき恋の思い）」というふうにある。特に、中学や高校においては、このように読みとることによつて、「言語」と「文芸」というものの関わり方や、日常的言語というものと文芸的言語というものの次元

〔注〕

の相違へ思いを及ぼす端緒になりはしないかと思ふのである。言葉というものは、過去の文芸の積み重ねの歴史のうちにある一定のイメージが付与されて行くわけで、この文芸の積み重ねは、「東下り」の場合、さらに下って謡曲「隅田川」の教材へと発展させることもできよう。謡曲における「隅田川」の設定は、「業平の恋人への思い」と「母の我が子への思い」ということを重ねあわせているのだという全体的見通しが考えられるのではあるまいか。「隅田川」は単なる武蔵国の地名ではなく、あの「東下り」の業平が恋人を思つた場所として発想されているのだということに気づけば、ここからすぐに、「歌枕・名所」という概念へ話をすすめることが可能である。さらに、それから「季語」という概念へ進むこともでき、俳句における季語の働きへも発展させてゆくことができる。

以上が、かつて、中学・高校で教えた二回の「東下り」の授業において、私自身疑問に感じたことを、私自身で解決してみた結果である。最初に述べたように、この解釈は、私の専門である江戸文学の解釈を応用したもので、適切であるかどうかはよくわからない。ただ、もし以上のように解釈できるとするならば、「東下り」の教材を他教材とこのように関連させて考えてみることはできるのであるかと思つたのである。しかし、勿論これは、「東下り」解釈の一つの試案というまでのことにすぎない。

(1) 歌の引用は、すべて「新編国歌大観」の表記(ただし、「万葉集」における漢字表記のみは「角日本古典文庫」に拠つた。また、国歌大観番号も「新編国歌大観」の番号に従つた。なお、「万葉集」は、旧国歌大観番号をも併記した。「古今和歌六帖」の異本については、「図書寮叢刊」の校異篇に拠つた。

(2) 河地修氏は「伊勢物語・東下りの生成」(『文学論叢』53、昭和53・12)において、歌枕「八橋」が、蜘蛛手に思ふ恋の心の象徴であつたとされる。恋の思いは、「八橋」によつてもひきおこされると言えるわけであるが、東山御文庫本「業平朝臣集」には、この部分、

あつまへまかるみちに、かきつはたのおもしろかりける所にをりて、かきつはたといふたいをくすへてよめと侍しかは

(日本大学国文学会「語文」10に拠る)  
とあり、また、尊経閣文庫本『在中将集』は、

あつまのかたにまかりけるに、かきつはたのおもしろかりけるを見て、木のかけにおりて、かきつはたといふもしろをくのかしらにすへてたひの心をよめといふ人ありければ

(「私家集大成 中古I」に拠る)

とあつて、「八橋」もでてこない。「かきつはた」のほうがむしろ、「遠く離れた恋人への思い」ということで、この場合は中心的地であつたと言えるのではないだろうか。

なお、「笠籠本」によれば、「かきつはた」の条りは、

そのさには、かきつはた、いとおもしろく、さきたり。それをみて、京いとこひしくおほえけり。さりければ、ある人「かきつはた」と云、いつもじを、くのかしらにすゑて、旅心よめ」といひければ、ひとりの人よめり。

(「日本古典全書」に拠る)

とある。「かきつはた」恋人——都——への連想を裏づけるものと考えられないだろうか。

(3) この指摘は、既に河地修氏「伊勢物語・東下りの生成」においてなされている。しかし、氏は、「すみだ河の場面がこの万葉……を下敷

にしたものであると主張するつもりは、私にはないと、やや控えめに論じておられる。

- (4) 竹岡正夫氏は、『伊勢物語全評釈』昭和62年、右文書院)において、「降り」は、「今ちらちら降っている最中ではなく、降って地上に積もり、敷いてある状態の雪である」とされる。しかし、

風に散る花かぞめる空さえてほどろほどろにふれるしら雪

(久安百首一五五)

きのふけふふじの高ねはかきくれてきよ見が関にふれる初雪

(清輔集二〇〇)

白玉のふれるとやむむみきはよりさやくちれるかがり火の影

(紀師匠曲水宴和歌一一)

等の例は、「今眼前に降り(落ち)つつある状態」と考えられる。やはり、「降り」は、現在降りつつある状態も、また、降って地上に敷いてある状態も、両方の場合があるとする方がよいと思われる。

- (5) 古注では、『伊勢物語惟清抄』に、「山ノ名普ラ云タテタリ。時知ラ又山ハ、フシノネニテ有ケリ。コナタハ五月ノツコモリ、既ニ六月ナルニ、イツト思ヒテカ富士ノネニ雪ハフルラント云リ。カノコマタラハ、ムラノニフル雪也」(天理図書館善本叢書)に拠る。とある。

『伊勢物語直解』『伊勢物語闕疑抄』『紹巴本伊勢物語付注』も大略同様であるが、特に『伊勢物語古意』が、本稿の立場に近い。

- (6) 石田穰二氏訳注『新版伊勢物語』(角川文庫、昭和54年)では、「この「いつとてか」について、

「いつとてか」を現行諸注は「今をいつと違って……」と訳すが、本来の使い方は「いつとということ」であり、この歌もやはり直訳としてはそう訳すべく、いったいいつ(どういう時に)、ということである。

とされる。ただ、訳においては、「いつとてか」を「らむ」にかける解釈を取っておられる。

- (7) このように解すれば、「らむ」についても、竹岡正夫氏の『古今和歌集全評釈(上)』(昭和51年、右文書院)の「らむ」の分類中、(4)(p.413)の変型と考えて用法的に矛盾がなくなる。

- (8) 二五・二六の歌は、壬申の乱直前の天武天皇の歌とされるが、「日本古典文学全集」の註に、古い伝承歌のパターンを踏まえたものとある。

- (9) 河地修氏「伊勢物語・東下りの生成」に、「富士の山」が、「かなわぬ恋の象徴」として、前の宇津の山との関連をもって叙述されているとの指摘が既にある。ただ、この場面は、富士の煙よりも、むしろ雪が中心となっている点を考えてみるべきだと思われる。

- (10) 尾形仍氏「ぬけ風の俳諧」(『国語と国文学』昭28・3)

#### 〈付記〉

本稿を成すに当たり、草稿の段階で、兼築信行・佐藤裕子・神野藤昭夫各氏の御注意をいただき、引用や形式の統一、および、文意不明瞭な部分の書き換えを行なうことが出来た。また、『万葉集』の引用について、川平ひとし氏より御教示をいただいた部分がある。併せて厚く御礼申し上げたい。なお、本稿の中学・高校における授業とは、東京大学附属中高等学校における授業(昭和48年度、52年度)である。自由な雰囲気の中で、様々な試行を受け入れて下さった、当時の教員諸氏、および生徒諸君にも、心より感謝申し上げる次第である。